

新クリーンセンターの 施設基本計画がまとまりました

市民参加で描いた環境とコストのバランスに配慮した新施設

市内のごみを処理する武蔵野クリーンセンターは、昭和59年に建設されたもの。主要設備のボイラや焼却炉は耐用年数の30年から35年に近づきつつあります。市では平成18年から新しい施設の実現に向けた議論や検討を行ってきましたが、このほど、施設基本計画を策定しました。

基本方針

① 新施設建設計画を進めていくにあたり、今後も「市民参加方式」を進めていきます。

② 地球環境の保全および費用対効果に配慮した安全・安心な施設づくりを進めていきます。

③ 新施設は東日本大震災を踏まえ、「災害に強い施設づくり」を行います。現施設よりさらに耐震性能を向上させるとともに、ごみ発電の災害時の活用を考えていきます。

④ 環境配慮を観点とした施設「エコセンター（仮称）」、「エコプラザ（仮称）」の整備を具体化します。

⑤ 民間事業者の最新技術や運営ノウハウを活用し、建設・運営コストの削減を図れる事業手法を採用するとともに、将来にわたる安全・安心な施設づくりを確立します。

市

では平成29年度の稼働に向けて、新クリーンセンターの計画づくりを進めています。平成22年2月には「新武蔵野クリーンセンター（仮称）施設基本計画策定委員会」を、また3月に「新武蔵野クリーンセンター（仮称）施設・周辺整備協議会」を設置し、新施設の計画と周辺のまちづくりを具現化するための議論を重ねてきました。

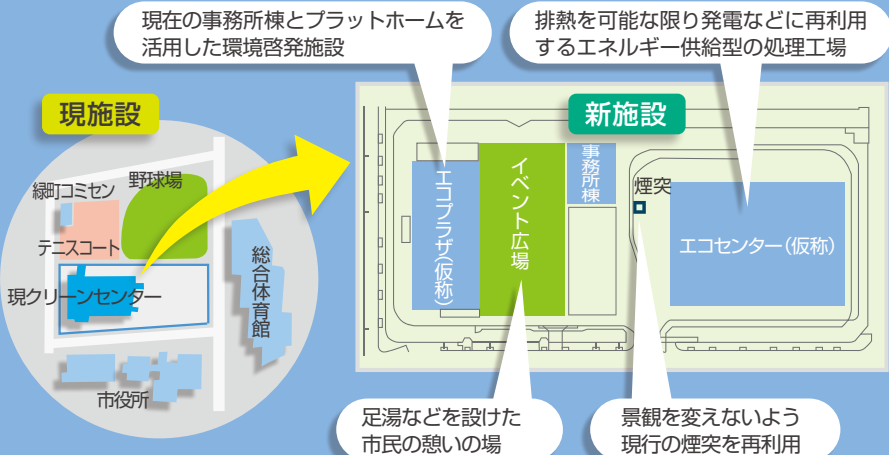
いずれの組織も市民と専門家が協議する「武蔵野方式」で進められてきました。今年の3月には同委員会および協議会から提言がまとめられ、これを受けて市では7月に「新武蔵野クリーンセンター（仮称）施設基本計画」を策定しました。計画は、安全・安心な施設づくりを大前提としながら、地球温暖化や周辺環境への配慮、そして市政が負担するコストのバランスを重視したものとなっています。

新クリーンセンター 配置案

現クリーンセンターの敷地内に新しい焼却施設であるエコセンター（仮称）を建設します。現在の事務所棟とプラットホームを活用した、環境啓発施設であるエコプラザ（仮称）と市民の憩いの場となるイベント広場を設ける予定です。



現クリーンセンター



新クリーンセンター 8つの特徴

5 災害に強い施設設計

新しい施設は、現在の施設以上に耐震性の高い施設にします。煙突にも十分な強度がありますが、さらに耐震補強を行い、より安全なものとしします。施設と煙突の両方で、耐震強度を現状の1.25倍まで高めます。

6 ごみ発電

新施設では、ごみ焼却で1時間あたり約2000～2500キロワットを発電します。施設で必要な電力（年間8000万円相当）をまかなうとともに、余った電力は電力会社へ売却するか、市庁舎や総合体育館で活用するか、今後詳細を検討します。

7 不燃ごみ・粗大ごみの処理施設の規模を1/5に縮小

分別収集やリサイクル処理が進んだため、不燃ごみ・粗大ごみの処理施設の規模を現施設の50トン／5時間から10トン／5時間に縮小します。爆発事故防止や機械による金属類の選別の効率化も図ります。

8 民間事業者との連携でコスト削減

市が責任を持って運営主体となる一方で、建設から長期的な運営までを一括して民間業者に委託し、コスト削減を図ります。建設の概算事業費は約80億円（建設費70億円、現施設解体費10億円）を想定しています。

今後のスケジュール

23年度	基本計画策定、事業者選定作業 生活環境影響調査、地質調査
24年度	事業者選定手続、土壤汚染状況調査
25年度	事業者決定、実施設計
26～28年度	新施設整備工事
29年度	新施設稼働、現施設解体
30年度	施設・周辺整備など
31年度	整備完成

1 ごみ量を削減し、焼却炉は195トン/日から120トン/日、3炉から2炉に

市では現在年間3万2000トンあるごみ量を平成29年度には3万トンとする減量化目標を掲げており、この計画に沿って新しい施設でもごみ処理の量を設定。処理能力は現施設の195トン／日から120トン／日、焼却炉は3炉から2炉にします。

2 湿式処理から乾式処理へ

全国でも最も厳しい排ガスの自主規制値を守ることを前提に、排ガス処理システムを湿式処理から乾式処理へ変更します。これは、地球温暖化対策と経済性、メンテナンス性を総合的に判断したものです。

湿式処理……液状の薬剤による排ガス処理方式
乾式処理……粉状の薬剤による排ガス処理方式

3 白煙防止装置を設置しない

現施設には清掃工場のイメージを和らげるため、煙突からの排ガスが白く見えることを防ぐ白煙防止装置が設置されています。新施設ではエネルギーや費用の節減のため、装置を設置しません。装置を設置しなくても白煙が極力見えないよう技術的に配慮します。

通常時



実験中



白煙防止装置を止める実験を行いました。

4 現施設の煙突を再利用

建設廃棄物や建設コストの削減、景観の保全などの観点から、現在の施設が使用している高さ59メートルの煙突は、補強をしたうえで再利用します。